



②

① 火入れ式では、木原村下（手前）と渡部村下の2人の村下が初種（はつだね）となる砂鉄を装入。70時間に及ぶ操作が始まります。  
 ② 「下灰」は炉を構築する前に、炉床をしつかりと炭で固める工程。燃えた薪を「シナエ」という道具で交互に叩き、1回に45分から1時間かけて細かな粉炭を作り出す。これを数回繰り返します。  
 ③ 操作中は、30分おきに砂鉄と木炭を装入。1回の操作で使用する砂鉄は約10ト、木炭は12ト。これを三昼夜繰り返し、3・5トの鋼となります。



③



①

いにしえ

# 古の炎 未来へつなぐ

日刀保たたら操業

日刀保たたらで、1月中旬から2月初旬にかけて、たたら操業が行われました。1月20日には、今年最初の操業の火入れ式が行われ、(公財)日本美術刀剣保存協会、日立金属安来製作所など関係者20人が出席し、金屋子神に操業の安全と成功を祈願しました。

たたら製鉄は、冬期の操業の他、砂鉄の採取や木炭の焼成、後継者養成実習操業など1年を通して行われています。たたら操業で生産された鋳は破碎され、大きさや破面、色から炭素量などの純度を判断し8種類に選鋼されます。選鋼された玉鋼は、全国の刀匠へと頒布され、日本刀の材料となります。

## ■たたら製鉄の歴史と今

たたら製鉄は、6世紀後半に朝鮮半島から伝えられたとされ、およそ1000年の時を駆け、日本独自の製鉄技術として江戸時代中期に現在の構造が完成しました。中国山地には、良質の砂鉄や粘土が豊富にあり、木炭の原料となる森林資源にも恵まれたため、最盛期の江戸時代後期には、奥出雲地方だけで国内の鉄の生産量の半分を占めました。

しかし明治に入ると、価格の安い洋鉄の輸入や、八幡製鉄所の操業開始など、急激に衰退し、1945年にその炎は一旦途絶えることとなります。

しかし、日本刀の原材料として不可欠な「玉鋼」の唯一の製鉄方法であるたたら製鉄は、日本美術刀剣保存協会によって、1977年に再開されました。現在は、木原明さんと渡部勝彦さんの2人の

村下、村下代行の三上孝徳さん堀尾薫さんと8人の養成員により操業が行われています。特に今年の操業は、後継者育成の観点から、砂鉄の装入は主に村下代行と村下養成員が行い、木原村下は統括という立場で操業されました。

昭和63年からは横田中学校の生徒が、また平成16年からは小学校の児童が「たたら体験学習」として毎年木原村下の指導の下、小さな炉を使ってたたら操業を体験しています。この中から将来の村下が誕生するかもしれません。

一度は途絶えた「古の炎」は、先人たちの誇りと共に、再び未来へとつながれていきます。

## ■重要文化的景観「日本遺産認定へ」

2014年、奥出雲町の棚田が中国地方初の「国の重要文化的景観」に選定されました。これは、たたら製鉄による鉄穴流しの跡地に拓かれた豊かな棚田が、環境と共生した世界に類のない循環型の鉱山跡地として認められたものです。

また、今年度から認定が始まった日本遺産に、奥出雲の宝である「たたら製鉄」の歴史をストーリー化して、来年度の認定を目指し、雲南市、安来市と共に国に申請しています。

出雲市出身の錦織良成監督によるたたら製鉄を題材とした映画「たたら侍」は、木原村下らが炉を作り指導しました。今年1月には撮影が終わり、公開に向けて準備が進められています。奥出雲町が誇るたたら製鉄が、今後ますます注目されます。